

「空手道」

山下 秀康

YAMASHITA Hideyasu

技術の習得だけでなく
青少年育成のための指導を

山下秀康さんには、50歳になる前に実現させたい夢があった。それは、JICAボランティアとして海外で活動することだ。「30代のときに青年海外協力隊の候補生として訓練を受けていましたが、健康上の理由から派遣を断念しました。それ以来、もう一度挑戦したいという思いが頭から離れずにいたんです」。そう語る山下さんの夢は、46歳となった2015年1月に実現した。派遣先はウズベキスタン。ここで、現地の人たちに空手道を教えている。ウズベキスタンでは旧ソ連時代に空手道が持ち込まれ、今では国内に8団体、約5万7000人の愛

「伝統空手道の心を伝える」

沖縄を発祥とする空手道。日本の心を伝えるべく、中央アジアのウズベキスタンで空手道を教えるシニア海外ボランティアとして活動しているのが、山下秀康さんだ。山下さんの熱のこもった指導が、現地の道場に変化をもたらしている。

JICA Volunteer Story

PROFILE

静岡県出身。1991年に明治大学商学部を卒業し、93年に全日本空手道剛柔会本部道場入門。剛柔流空手道尚武会3段。全日本空手道連盟公認3段。2015年1月から、シニア海外ボランティア(空手道)としてウズベキスタンで活動中。



タシケント市内の道場で、子どもたちに空手道の指導を行う山下さん



好家がいるとされる。山下さんが配属されているのは、2003年に首都タシケントに設立された伝統不動館空手道連盟だ。「不動館」はセルビア人が創設した会派で、タシケント市内にある14の道場で約500人の会員が練習に励んでいる。

一方、1993年に全日本空手道剛柔会の本部道場入門した山下さんの流派は「剛柔流」。不動館と流派は異なるが、修練を通して自分を磨き人生を豊かにするという空手道共通の本質を伝え、それを青少年の育成に役立てるべく、7つの道場を巡回して主に子どもたちの指導にあたっている。

「練習生の中には、ポイントの取れる攻撃技にしか興味を示さない人もいます。そこで、空手道はそもそも護身の術であり、防衛のための受け技が大事だと伝えることで、伝統空手道の技の多様さと奥深さを知ってもらうように心掛けています」と山下さん。また、現地の練習生は力任せに闘おうとする傾向が強いので、剛柔流の「カキエ」と呼ばれる2人で行う稽古法を取り入れ、体力の劣る人でも相手の力を利用して闘える術を教えている。

現地の指導者たちも積極的に山下さんに協力し、お互いが得意とする技を分担して指導している。当初、初心者クラスで山下さんのアシスタントを務めていた19歳のニキータ・レジャーニンさんは、今では2つの道場で、子どもたちの指導を任されている。

「今年2月からは、私がニキータさんの担当道場の補助指導を行っています。現地の指導者の数は不足していますが、彼のように立派に成長した姿を見ると感慨深いものがあります」と山下さんは話す。

大舞台での快挙の裏にある
子どもたちの意識の変化

先生、先輩、仲間、道場の管理者、そして月謝を払ってくれる家族に対する感謝の気持ちを態度で示



a.稽古の後には説法を行い、挨拶や礼儀の大切さを伝えている
b.地元テレビ局の取材に応じ、伝統空手道を紹介する山下さん
c.山下さんと一緒に子どもたちを指導するニキータ・レジャーニンさん(右)は、不動館空手道の初段だ
d.現地の指導者たち。山下さんから、空手道が健全な青少年育成につながることを学んでいる

す——山下さんが常日頃から子どもたちに伝えていることだ。ウズベク語とロシア語の2つの言葉の壁は大きく、週3回の語学レッスンを受講するほど苦労しているというが、山下さんの気持ちが入った指導によって、子どもたちの練習に対する姿勢が変わってきた。「空手道の発祥地である沖縄の『守礼の文化』と、空手の心を折に触れて話すようにしています。最近では、子どもたちに思いやりや礼儀を大切に育てる心が育っているのを感じます」。空手道が日本の武道であることを漠然と知ってはいたものの、単なるスポーツの一つとして捉えていた練習生も、山下さんから日本や沖縄の文化を耳にする機会が増えたことで空手道の深みを感じ、より興味を持つようになったという。

道場に生まれている変化は、試合の成果にも表れた。2015年12月にセルビアで開催されたユニイテッド・ワールド空手連盟(UWKF)世界大会。この大舞台で、山下さんの教え子たちが次々と入賞を果たした。団体の部も合わせると2つの金メダルを獲得し、「フルコンタクト組手の部(剛柔流)」では8個のメダルを獲得したのだ。

今年、9月と11月に世界大会が控えている。山下さんは大会に出場する選手たちの強化指導にあたり、道場の子どもたちには引き続き、伝統空手道の心と技の伝達をモットーに、基礎づくりに励んでいくことを目標に掲げている。

そんな山下さんには、海外に関心がある日本の若い世代の人たちに伝えたいことがあるという。「昨年度は、JICAボランティアの空手道隊員に応募した人が少なかったと聞き、寂しい気持ちがありました。せっかくある機会を活用しない手はないと思います。海外での空手道指導は楽しいですよ!」。2020年の東京オリンピック正式種目に追加された空手道を、日本と世界が一緒になって盛り上げていくことが、山下さんのもう一つの希望だ。